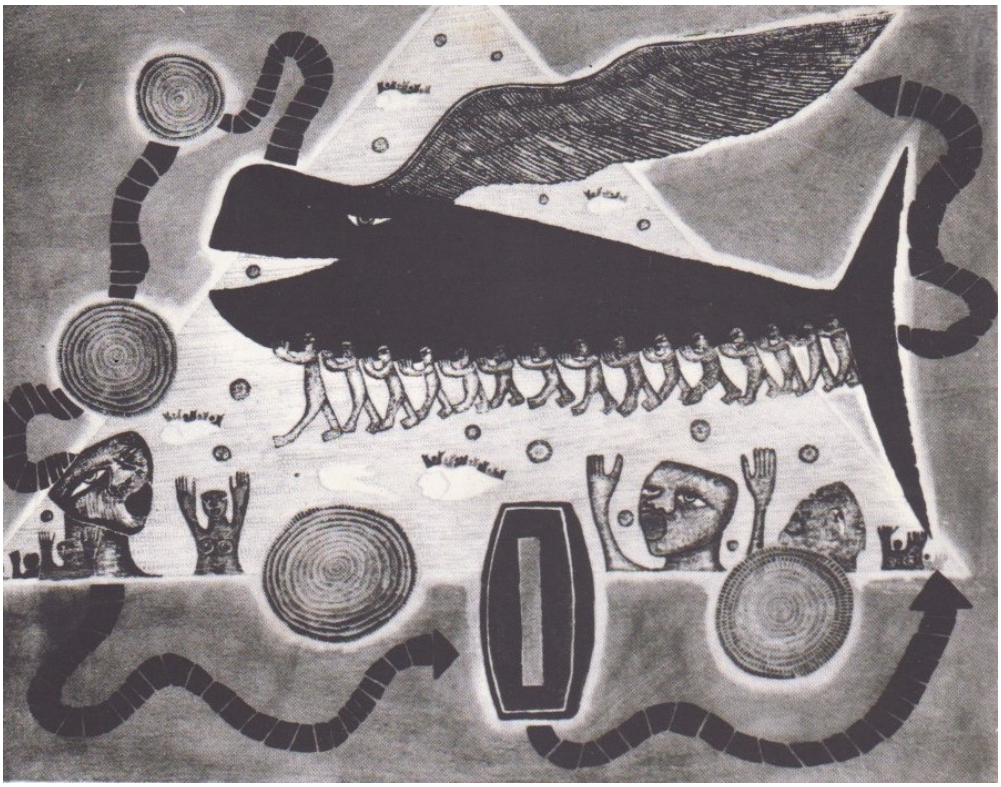

絵とこころざし

江原 順

桜井孝身というと、かんかん帽をかむって、九州派を率いて颯爽と東京銀座の画廊にあらわれた時のことが私の目に浮ぶ。どういうものかこの時の桜井の顔まで目のまえに再現してくるのである。私たちは二十歳台の終りだったのではないかと思う。オチ・オサム、石橋泰幸、長頼子、山内重太郎、菊畑茂久馬などという作家の名やそれぞれの大胆な作品を今も覚えている。

別に回顧的にこのことを書いているのではなくて、一九六〇年頃までに、日本で三つ、実験的で破目をはずしたグループがあって、ひとつは東京の「ネオ・ダダ」大阪の「具体」、それと桜井たちの「九州派」である。これらの動きを綜合したのが読売アンデパンダン展で、戦後美術はこの動きを無視しては語れない。

そんなに貴重な運動なのに、そして、これらの動きがもう歴史にくみ込まれているのに、それらについてまともな記録が残っていない。創造ということが不断の否定だということが本当だとしても、これは過去を無視することでは毛頭ないのだから、折角建てられた地方の美術館が中心になって、展示と記録をしておいてもらいたいと思う。